

金関恕名誉教授の卒寿を言祝ぐ

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

戦後の考古学史を体現

11月19日、天理大学名誉教授の金関恕先生が90歳の誕生日を迎えられた。現在の考古学界ではほぼ最長老の碩学で、戦後における考古学の歴史をまさに体現しておられる先生のご存在はますます重みを増している。現在も天理市内にお住まいで、ご体調に気遣いながら、奥様と多くの書籍、音楽に囲まれて毎日を過ごし、大学で開催される折々の行事などにも足を運んでいただいている。



1927年、京都にお生まれになった金関恕先生は、人類学者の金関丈夫氏を父として、幼少時代を台湾で過ごし、旧制の松江高等学校を経て、戦後、新制の

京都大学で考古学を学ばれた。梅原末治、小林行雄両先生の教えを受け、遺物の観察、実測、製図、写真撮影といった考古学に必要な技術を厳しく叩き込まれた先生は、三重の石山古墳、山口県の土井ヶ浜遺跡をはじめ、学生時代から数々の遺跡調査で現場作業の経験を積まれた。京都大学を卒業後は、坪井清足氏が率いる奈良国立文化財研究所に職を得て、飛鳥寺の発掘調査に従事された。

1959年、縁あって天理大学に赴任された先生は、その後も、種子島の広田遺跡、天理市内の東大寺山古墳といった著名な遺跡の発掘調査が続き、綾羅木・郷など山口県下の諸遺跡をはじめ、池上・曾根遺跡、吉野ヶ里遺跡など、数多くの遺跡の調査と保存に尽力された。国外においても、早く1960年代に、イスラエルのテル・ゼロール遺跡の発掘調査に加わり、同地における組織的な発掘調査の方法と体制を学んで、日本の考古学に導入された。すなわち、大阪府池上遺跡の発掘調査に際して、「イスラエル方式」を部分的に採用し、それが、70年代の高度成長期における初期の行政発掘調査の体制を整えるのに大きな貢献をしたのであった。

先生はまた、実に38年の永きにわたって天理大学の教壇に立ち、美術史、博物館学、考古学の講義を通して、あるいは学生が組織したクラブ「歴史研究会」の顧問として、そして最後の5年間は、ご自身が設立された考古学専攻の研究室において、人材の育成と考古学の発展と普及に尽くされた。また、先生は、『弥生文化の研究』といった書物の編著者として、あるいは、各地のシンポジウムの講師やコーディネーターとしても活躍され、先生ならではの巧みな文章と話術で多くの人を魅了された。

一方、1997年に天理大学を退職された後も、大阪府立弥生文化博物館の館長を務める傍ら、旺盛な研究活動を継続し、懸案だった広田遺跡、東大寺山古墳、土井ヶ浜遺跡の発掘調査報告書を次々と刊行され、長年の肩の荷を下ろされた。先生のお話によれば、広田遺跡の大量の貝製品、東大寺山遺跡の中平銘鉄刀は、発見当時は、そのうちまた別の遺跡で同様のものが見

つかるだろうと思っていたそうだが、どちらもその後、後に続く例が全くない。報告書の出版を受けて、広田遺跡の出土資料は重要文化財、東大寺山古墳の出土資料は国宝に指定されることになった。

著書『考古学と精神文化』

残念なのは、先生が天理大学在職中、とくに1970～90年代にかけて、意欲的に執筆された代表的な論考の数々がこれまで1冊の書物にまとまっていなかったことだった。そこで、金関先生が卒寿を迎えられるにあたり、先生の薫陶を受け、導いていただいた有志一同が協議を行い、今般、『考古学と精神文化』と題して出版されることになった。



同書の第I章「日本と世界の考古学」では、戦後まもなくの京都大学考古学教室に学んだ経験、天理大学在職中に交換教授としてインディアナ大学で教鞭を執られた経験、イスラエル、テル・ゼロールの発掘調査に従事した経験などを活かし、日本の考古学と世界の考古学を比較検討しながら、考古学という学問の歴史や実践について考察と展望を行った論考が収録される。第II章「考古学と精神文化」では、金関先生が、天理大学在職中に、宗教学や国文学との出会いの中から、精神文化に対する考古学的なアプローチの方法を模索し、古代の習俗や宗教について理解を深められた論考が取められる。幅広い学識を活かしたこうした方面の研究成果は、今なお、他の追隨を許すものではなく、まさに白眉と言ってよい。

第III章「アジアの中の弥生文化」では、古代中国の青銅器の研究から研究活動を開始され、土井ヶ浜遺跡、池上遺跡など、日本を代表する弥生時代の遺跡調査に従事された経験を踏まえ、日本の弥生時代とその社会をアジア的視点から見つめる論考が並ぶ。そして、第IV章「古墳の始まりと中平銘鉄刀」では、古墳時代前期の古墳が集中する天理市に居住・在職され、また、自身、「中平」銘文鉄刀が出土したことで知られる東大寺山古墳の発掘調査に従事した経験を踏まえ、古墳の築造、王権の成立、東アジア世界との関連などが、縦横に論じられる。

11月29日、天理市内で開催された先生の卒寿をお祝いする会には、全国から教え子が集まり、先生とご家族、そして新しく出版されたご著書を囲んで祝杯をあげ、楽しい一時過ごすことができました。出版された著書を見ると、先生ご自身の実体験と幅広い学識を踏まえて、その折々に先生が思索を重ね、洞察を深められた経緯がよくわかる。先生の学問的足跡は、考古学という学問を通じた社会に対する知的貢献とあってよく、また、ある意味、戦後日本社会の一断面をも伝えている。時代を経ても色あせることなく、多くの示唆や含蓄に富んだ同書を通して、金関先生の学問＝「金関考古学」のエッセンスが新たな多くの読者に伝わることを願いたい（同書、「あとがき」を改変）。